

認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

平成 29 年九州北部豪雨水害 被災者支援 活動中間報告書（第 2 版）



2017 年 7 月 5 日～2017 年 10 月 31 日までの報告

大分県日田市



日田市は福岡空港から車で1時間ほど南下した場所に位置し、人口は約6万7千人、高齢化率は22%で、面積約666km²、18の小学校区から構成されています。周囲を山に囲まれた典型的な盆地で、多くの河川が流れ込み、水辺の美しい自然と景色に囲まれた「水郷（すいきょう）」の町として有名です。400年も続く鵜飼も盛んで、夏から秋にかけては、鮎・鰻・ヤマメ漁で賑わいます。また、市街地は江戸の面影の残る町並みが広がり、ご当地グルメの「日田やきそば」も人気があります。

主な産業は農業と林業。毎年おいしい米や野菜・果物などが多く収穫される一方、盆地のため、夏は35℃を超える猛暑日が多く、冬は10mを越す積雪が見られることもあります。年間の降水量も多く、根が浅い杉や檜の栽培が土砂崩れ等の自然災害を発生させる原因にもなっています。そのため、平成24年7月九州北部豪雨の被害を受けています。

1時間最大降雨量 87.5 mm、24時間雨量 370 mm（観測史上最高）
 死者3名、全壊45世帯、大規模半壊31世帯、半壊325世帯、
 床上浸水143世帯、床下浸水781世帯の家屋被害
 みなし仮設*には約370戸が入居

*みなし仮設：民間住宅を国や自治体が借り上げて、仮設住宅の代わりとして被災者に提供したり、公営住宅や雇用促進住宅、被災者が自力で借りた賃貸住宅も仮設住宅とみなしたりした住宅を総称して「みなし仮設」とし、家賃などを国が負担している。



活動記録

- 2017年
- 7/6 RSY 松永が福岡経由で大分県日田市入り
 - 7/7 日田市内で情報収取（被災状況の視察を含む）
日田市にボランティア活動資器材搬出
 - 7/8 日田市災害ボランティアセンター（VC）にて名古屋からの資器材受け入れ
街頭募金（22名参加・85,786円）
 - 7/9～ 日田市災害VC（本所）運営支援
街頭募金（40名参加・252,123円）
 - 7/12～16 RSY 浦野が朝倉入り（避難所環境改善のための支援）
 - 7/14 朝倉市にボランティア活動資器材を搬出
 - 7/15 朝倉市災害ボランティアセンターにて名古屋からの資器材受け入れ
 - 7/16～ 日田市災害VC 大鶴サテライト運営支援
 - 7/24～29 RSY 浦野が朝倉入り（避難所環境改善のための支援）
 - 7/29 第1回「日田市災害VC 情報共有会議」に参加
 - 8/4 大鶴地区「豪雨災害に関する自治会長懇談会」に参加
 - 8/5 第2回「日田市災害VC 情報共有会議」に参加
街頭募金（15名参加・55,678円）
 - 8/6 街頭募金（19名・72,142円）
 - 8/11 第1回「日田市豪雨被害復旧・生活支援のためのNPO 情報共有集会」に参加
 - 8/12 第3回「日田市社協情報共有会議」に参加
 - 8/17 JVOAD「九州北部豪雨支援者情報共有会議」に参加
 - 8/18 小野地区「豪雨災害に関する自治会長懇談会」に参加
 - 8/26 子ども企画「川・山へ行こう！！」へ企画協力
 - 8/27～28 大鶴地区でなごや防災ボラネットと共に足湯ボランティア・サロン開催
 - 8/28 第2回「日田市豪雨被害復旧・生活支援のためのNPO 情報共有集会」に参加
 - 9/1～ 「ひちくボランティアセンター」運営支援
 - 9/1 日田市主催「被災者との意見交換会@小野地区」に参加
 - 9/4 RSY 九州北部豪雨水害支援活動報告会
 - 9/4 日田市主催「被災者との意見交換会@大鶴地区」に参加
 - 9/6 日田市主催「被災者との意見交換会@東有田地区」に参加
 - 9/18 大分県津久見市へ日田市の資機材を輸送
 - 10/5 ネットワーク会議に参加
 - 10/28 「みんなで大鶴交流会」に参加

＜定例開催（9月～）＞

- ・ひちくボランティアセンター事務局会議（毎週木曜日 18:00～）
- ・ひちくボランティアセンター世話人団体会議（毎週木曜日 19:00～）
- ・ボランティアセンター運営（毎週金～日・祝 8:00～16:00）

福岡県朝倉市支援 避難所環境改善

朝倉市からの要請を受け、全国災害ボランティア団体支援ネットワーク（JVOAD）と協働し、市内 7 箇所・約 600 名の避難所改善を行ないました。市や JVOAD の連携団体である 3NPO 団体らと、トイレ・寝床・衛生・福祉避難スペースの設置や改善、孤立や生活不活発病防止のための日中活動の取組みなどについて検討し、できるところから整備を行ないました。

また、7 月 29 日には、地元のボランティア連絡協議会と外部支援者、市の担当課らと共に、「今後の支援を考えるワークショップ」を開催。地元ボランティアの強みを活かした長期的な支援活動を進めるためのきっかけづくりをサポートしました。



大分県日田市支援 ボランティア活動資材の提供

大分県社協より、大分県日田市への資器材貸出の要請があり、4 トントラック 1 台分の資器材を搬出しました。搬出作業は、中部土木株式会社・防災ボランティアネット守山・名古屋みどり災害ボランティアネットワーク・名古屋きた災害ボランティアネットワーク・名古屋ひがし防災ボランティアネットワーク・災害ボランティアちくさネットワーク・RSY ボランティアの方々、スタッフ合わせて 22 名で行いました。



避難所支援

7 月 9 日時点で市内には 46 か所（内自主避難所 9 か所）・373 名の避難所が開設されました。市内 4 か所の避難所を訪問し、被災者の不安の声を聞き取ったところ、「復旧作業やこれからどうしたらいいか不安」という声に対し、震災がつなぐ全国ネットワーク（震つな）が発行した水害被災者向けのブックレット「水害にあったときに」を避難所に配布しました。



●日田市災害ボランティアセンター運営サポート

7月8日、日田市社会福祉協議会からの要請を受け、日田市災害VCの運営支援として主にニーズ調査を担当しました。水害時の復旧作業は、畳を上げて床板を剥がし、泥出・消毒・乾燥の手順が必要です。過去の災害では十分な処理をしないまま泥を放置し、数週間経った後にカビが発生したという事例もあります。そこで、被災していると思われる家屋を個別訪問し、丁寧なヒアリングと状況確認を重ねながらニーズ調査を行ないました。日田市社協や地域おこし協力隊、集落支援員にも同行してもらったことで、住民の方々が安心して困り事が訴えられる環境づくりも整いました。7月16日には、被害の大きかった大鶴地区にVCのサテライト（支所）が設置され、RSYは他NPOと共に運営の中核を担いました。災害VCは家屋優先のため、事業所は支援の対象外となっていましたが、小野地区の小鹿田（おんた）焼の窯元や小規模事業所も町の産業復興を支える重要な支援先と考え、NPOが対応できるよう柔軟な体制づくりにも努めました。

また、日田市災害VCの今後について検討することを目的に、日田市社協・大分県社協・県内派遣社協・災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）・被災地NGO協働センターとともに、被災者ニーズの変化や災害VC閉所後の支援と連携についてともに協議しました。



外部支援者の受け入れ、マッチング

ニーズ調査を行う中で、大鶴地区の被災者に「車が全て水没して移動手段がなくなってしまった」と話す方が2世帯あり、車を無償貸与する支援を行っている、日本カーシェアリング協会に相談し、各世帯に移動車を支援してもえるようになりました。また、中部土木株式会社様より、トイレカー10台を貸与いただき、福岡県朝倉市に8台と大分県日田市に2台に配置しました。どちらも、断水地区の被災者やボランティアに活用頂きました。トイレカーの車庫がある福岡県鞍手町から現地までの輸送は、エフコープ生活協同組合様にご協力いただきました。



●集落支援 地区住民との意見交換会

甚大な被害のあった大鶴地区と小野地区にて、市まちづくり推進課主催の自治会長との意見交換会が開催され、RSYをはじめ支援に携わるNPOも参加しました。この会は、地域の課題や自治会長が抱える悩みを聞き、情報共有を行うことを目的としています。大鶴地区では、地区が広いために集落毎での災害に対する温度差がある、台風等による二次災害の恐怖、次の災害を恐れて移転する住民が増えている等の課題があげられました。また、小野地区住民からは「ボランティアにお願いするのに遠慮がちな住民が多い」などの声も上がり、住民の心的状況や生活実態に配慮した丁寧な関わりと信頼づくりが重要だと感じました。

また、小野地区では9月1日、行政が復旧や復興の進め方について住民の意見を聞く意見交換会が開催されました。住民役70名が参加し、孤立集落での今後の避難や、水害の影響を受けない安全な土地の確保、農地復旧、今度の土砂崩れの危険性や対策など多岐に渡る不安の声が聞かれました。



子ども支援

小学校の校庭やスポーツグラウンド等が災害の影響で使えなくなったことや、夏休みのプールが監視員の確保ができず開放されないなどの理由で、子どもたちの遊び場が激減しました。そこで、楽しい夏休みの思い出づくりに、被災地NGO協働センター主催・RSY協力のもと、大鶴地区の子どもたちを対象に、8月20日「天ヶ瀬B&GプールへGO」、8月26日「前津江町山川遊び」を企画。全体で約50名の子どもたちが参加しました。山川遊びプログラムは当日あいにくの雨模様だったので、鯛生金山での砂金掘りや巨大シャボン玉、紙飛行機づくりに急遽変更。子どもたちは終始大はしゃぎでした。

また、水害後の家の補修や片付けで、子ども同士のおしゃべりの場所や勉強スペースが確保できないという声を聞き、東日本大震災でRSYが支援を継続している宮城県七ヶ浜町で、子どもからお年寄りまで大人気だった移動式学習カー「きずな号」を日田に向けて運行。これからの活用に大きな期待が寄せられています。



足湯ボランティア（震災がつなぐ全国ネットワークとの連携）

自治会長から「地域の中に話しをしたい人が多いので、話を聞いてやって欲しい」との声があり、8月から震災がつなぐ全国ネットワークの加盟団体である、「しずおか茶の国会議」、「災害ボランティアコーディネーターなごや（ボラこなごや）」とRSYで、大鶴地区内の公民館にてお茶会・足湯ボランティアを行っています。これまで約70名の住民の心と足を温め、憩いの場となりました。また、足湯に合わせて、大分県弁護士会や日田鍼灸師会も参画し、法律相談やマッサージ等も行われました。



●ネットワーク支援

8月11日と28日、おおいたNPOデザインセンターとJVOADの声かけで「日田市豪雨被害復旧・生活支援のためのNPO情報共有集会」が開催されました。この集会は、行政・社協・地域住民・県内外NPOの対話を目的として実現しました。第1回情報共有集会では、参加者50名が集まり、関係機関の顔合わせの場となりました。第2回情報共有集会では、日田市災害ボランティアセンター閉鎖後の支援の方向性について話し合い、住民と行政、社協をつなぐ中間組織の新たなネットワークとして、「ひちくボランティアセンター」を開設することが決定しました。

運営母体には地元のNPO法人や任意ボランティア団体、日田市から委嘱されている集落支援員や地域おこし協力隊、加えて当法人などの外部支援団体が連携して関わっています。日田市社協が運営していた災害ボランティアセンターの閉鎖後に残る、田畑の復旧、家の片付けなどのニーズを継続的に支援するとともに、癒しの場作り、支援や各種相談窓口、加えて先々には災害に強い町づくりを見据えて活動しています。「ひちく」という名称は、「肥筑方言」などに用いられる地域の総称で、エリアとしては中・北部九州地域を包括しており、今回豪雨にて被災した福岡県西部や大分県日田市も含むことから名づけられました。



ボランティアセンター（ひちくボランティアセンター）

ひちくボランティアセンターは、9月1日から毎週金～日・祝日にボランティアの受け入れを行い、RSYは事業全般のサポートを実施しました。9月からの2ヵ月間で、ボランティア約1000名を受け入れ、被災者から約90件の要望に対して約60件に対応しました。

8月末に日田市災害ボランティアセンターが閉所した後も、自宅内外や側溝などの泥出し作業のニーズが寄せられ、10月からは農地の泥出しやビニールハウスの解体作業が増えています。ニーズ対応は、一般ボランティアの他、ひちくボランティアセンターに参画する、地元のチーム大分・鶴の恩返し、外部支援者の愛知人・ロハス南阿蘇たすけあいなどが活動しています。活動状況等はフェイスブックで随時発信し、日田市の現状を伝えています。

センターの運営スタッフには、地元NPO学びあいや日田市地域おこし協力隊・集落支援員、住民などが協力しています。ひちくボランティアセンターが被災者のボランティアニーズの受け皿として活動を続けています。



ネットワーク会議（ひちくボランティアセンター）

ひちくボランティアセンターとおおいたNPOデザインセンターが共催で、日田市の現状報告と支援団体の繋がりづくりを目的とし、水害から3ヵ月が経つ10月5日に「ネットワーク会議」を開催しました。事務局からボランティアセンター等の取り組みの情報と課題の共有を行い、その後は「日田へのボランティアを増やすために」をテーマとし、参加者とともに意見交換を行いました。

参加者からは「地元の繋がりを活かし大学や企業に呼びかけをする」「福岡発のボランティアパック、観光面とセットにしてはどうか」などの意見が出ました。また、日田市の住民から「ボランティアばかりに頼ってはいけない。地元からボランティアを出すために、地元がどうしたいかを聞き出す会議を行ったほうが良い」との意見が出て、今後は地元主体になっていかなければならないと考える団体が多いと感じました。日中は泥出しなどの現場で走り回っている団体も多く、ネットワーク会議が双方の想いを共有する場となりました。今後も継続してネットワーク会議を行っていく予定です。



みんなで！大鶴交流会（ひちくボランティアセンター）

日田市大鶴地区では、被災の影響で年度内のイベントを自粛しましたが、住民を元気づけようと、10月28日、ひちくボランティアセンターと大鶴振興協議会が共催で、「みんなで大鶴交流会」を開催し、RSYも企画準備等をサポートしました。

当日はあいにくの雨天で、大鶴公民館内での開催となりましたが、住民約300名が参加し交流しました。みなし仮設住宅にお住まいの参加者は、「気心しれた人達に会えて嬉しい」と話していた一方で、「支援の情報がほとんど届かない」と話すなど、課題があることがわかりました。地元内外の企業やボランティア団体も企画に協力いただき、交流の場づくりに努めました。



全国災害ボランティア団体支援ネットワーク（JVOAD）

支援の抜け、モレや重複を防ぎ、地域にニーズにあった支援活動を促進するため、ニーズや支援に関する情報を集約し、支援活動の調整機能としての役割を果たしています。朝倉市役所朝倉支所の一画に事務所を構え、事務局はピースボートやJPFなどが連携して運営しています。週3回、19時より朝倉支所にて支援団体の情報共有会議を開催（8月末までに38回開催）。誰でも参加可能なオープンな会議で、地元の団体、外部支援者（NPO、NGO）らが参加しています。現在までに約100団体近くが参加しています。



震災がつなぐ全国ネットワーク（震つな）

震つなでは、日田駅の近くに事務所兼宿泊施設（日田ベース）を構え、震つな加盟団体および、関連団体・個人のボランティア受け入れを行なっています。「一人ひとりの生の声を大切にする」をモットーに、足湯やお茶飲み場など、癒しや心の内を安心して吐き出せる場作りを中心に活動しています。

また、水害から復興までに必要な対応や手続き、受けられる支援について分かりやすくまとめた冊子「水害にあった時に」を作成。新聞・ラジオ等のマスコミ各方面にも多数取り上げられると共に、朝倉市や日田市の被災者宅を訪問、手渡しするなど、これまで6,000部を超える冊子を配布しています。被災者からは、「非常に分かりやすい」「冊子を読むことで先の見通しを持って生活できる」など大変好評を頂いています。





認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード
平成 29 年九州北部豪雨水害 被災者支援
活動中間報告書

2017 年 10 月 31 日発行

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード (RSY)

(名古屋事務所)

〒461-0001

名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階

tel 052-253-7550 fax 052-253-7552

e-mail info@rsy-nagoya.com

web http://rsy-nagoya.com/

twitter rescuestockyard

facebook rsy.nagoya